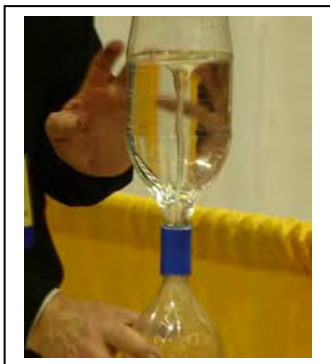


◇ アメリカ気象学会の余聞（子供向け Weather Festa）

このイベントは、気象学会本体が開催される前の日曜日に子供向けに開催されるもので、大学、企業、学校の先生などが、気象および水に関係したさまざまな実験や展示を行っています。

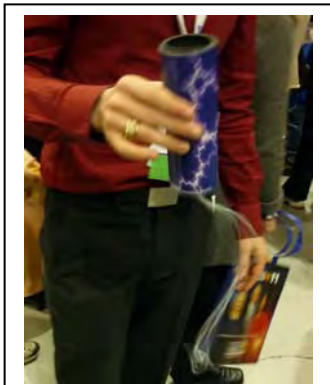
子供たちに人気のあるのは、テレビのクロマキーシステムを使った「天気キャスター」コーナーで、記念撮影も含めて多くの子供たちが集まります。それ以外にも、熱した空き缶を氷水で冷やして、缶をつぶす実験や、静電気発生装置を使った雷の模擬体験など、日本でもお馴染みの実験も多くみられました。



子供達は洋の東西を問わず積極的で、雷体験のほか、参加型の実験が多くの子供を集めています。ちょっと気象とは関係ないが、「スポンジを使って雨量計にどれだけ雨を降らせられるか?」「ペットボトルで一番早く水を動かせるのは誰か?」のようなチャレンジなどです。

ペットボトルの実験は、ペットボトルをつなぐ、簡単なプラスチックのジョイントを使ったもので、うまく渦を作って水を移動させるのが、水を素早く移すコツです。以前は、この実験をトルネードと関連づけて説明していたブースが多かったが、水でできる渦と空気の渦の話を直接説明するのが難しかったためか、純粋な競争としての実験になっています。

あまり人気はありませんが、洪水やなだれに関するミニチュア実験もいくつかのブースで行われています。この洪水実験は、ミニチュアの地形モデル（川や道路）に車などを置いて、flash floodのデモをするものです。なだれは、やや粘度の高い粉をデモの地形の上に積もらせ、地形の条件（地面がすべり易いか否か、地面に木があるか否か等）により雪崩の危険度を見せるものです。子供たちにあまり人気はないが、なだれの危険度を直感的に理解するには簡単でわかりやすい教材という印象をもちました。さらに、色を変えれば土砂災害の実験にも応用できるかもしれません。



そのほか、気象の物理的な過程とはまったく関係ありませんが、プラスチックの筒の片方に膜を張り、その膜にバネを取り付け、このバネを回すときに出る摩擦音を筒を使って増幅することで、発雷時のゴロゴロという音と良く似た音を再現できる、中国語で書けばさしづめ「雷鳴筒」とでも表記できそうな実験道具も展示されていました。「天気」の教材としてはなかなか説明が難しいが、「音」の学習としてはいろいろの展開ができそうな小道具と言えるでしょう。



(財団法人気象業務支援センター振興部長代理 登内道彦)